Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P94

子育て支援としてのおやこ教室の実践

絵本の感想にみられた子育ての楽しみや悩み

渡邉純　佐藤利一　出雲美枝子　末吉敏子　乾　恵子　松田照子　今井智代美
（大阪芸術大学附属幼稚園）

はじめに

我々は、未就園児を対象に「おやこ教室」を開催して約１５年になる。その形態は少しずつ変化してきているが、現在のように毎年５月から１２月まで１回約２時間、年間約15回になってから数年になる。内容の詳細は、昨年の本学会でも発表したが、簡単に述べると、本学附属４幼稚園において、２歳から３歳の幼児とその保護者を対象に１回４０から６０組のグループで、主に親子で楽しめる遊びや運動、調理や制作を体験するプログラムを用意しているが、「おやこ教室」の時間のみ親子で楽しませることが目的ではなく、この体験を家庭に持ち帰ることで、どうかかわってよいか迷う保護者に対して子どもとかかわるきっかけのアイデアを提供することを主たる目的としている。また、子育てに対する不安や子どもの心身の発達についての個別相談も実施してきた。更に、家庭での親子のふれあいを促進させることを目的のひとつとして、幼稚園の所有する絵本の貸し出しも行っていたが、今年度は、その絵本の返却時に保護者に感想を書いてもらうことにした。そこでは、絵本の内容に対する感想が述べられたものや子どもの反応についての感想が、中心であったが、保護者自身の心情や体験が述べられたものが多くみられた。そこで、今回は、その感想にみられた保護者の子育てに対する楽しみや悩みについて抽出し、絵本を読み聞かせることが、読み手である保護者にどのような影響を与えているのかについて若干の検討を加えたので報告する。

対象と方法

対象は、本学附属４幼稚園で開催する「おやこ教室」に参加する保護者４３０名である。方法は、平成１４年５月から９月までの間に絵本を貸し出す際に、無記名の感想文記入用紙を手渡し、絵本返却時に、自由記述の感想文を返却してもらった。絵本の貸し出冊数は４園合計３１４６冊で、その内８６７通の感想が得られた。得られた感想の中から、保護者自身の心情や子育てに関連する感想１３４通を抽出した。その内容から浮かび上がった子育ての楽しみや喜び、悩み等の背景や要因について

1. 保護者自身の心情を振り返ったもの
2. 子育てについての反省をこめたもの
3. 子どもの心情に気づかされたもの

の３つに分類し、絵本を保護者が読むことについて考察を加えた。

結果

1. 保護者自身の心情を述べた感想　５８通

保護者自身の現在の生活状況を振り返ったり、子ども時代の経験を思い出しながら述べられたものが大半であった。不安や後悔といった感情を絵本を通して浄化している傾向も感じられた。

① 「子どもが絵本の世界に参加できるのがうれしかったようです。１人でもぞうさんに話しかけながらうれしそうでした。昼食にチャーハンを作ってあげると喜んでくれて、母子ともに絵本を見ることが意外にも楽しめてよかったです。」

② 「お母さんくまの優しい言葉は私の見習いたいところだと思いました。」（くまくんのしっぽ）

③「４月から始まった新しい生活。子どもも親の私もお友達ができるか、期待半分、不安半分。でも、くまさんのように勇気を出してひとこと声をかければいいんだ。背中を押してもらえた気になりました。」（たんたん）

④ 「たまには、私も赤ちゃんに戻ってみたいです。お掃除したり、買い物したり、洗濯したり、ご飯作ったりお母さんがして当たり前じゃないです。わかってね。お父さん。子どもたち。」（もしもぼくがあかちゃんだったら）

⑤ 「最近、幼いころから結婚前のことをよく思い出します。“あのときあーだったらなあとか、こうすればよかったとか、でも子どもたちの顔をみるとこれでよかったのよと思います。」（ビリーは１２歳）

⑥ 「胸が熱くなりました。思わず主人にも勧め、夫婦で読みました。私たちもこんなふうに歳を重ねていくと思ったら、今を大切に一緒に成長していければと思いました。」（ビリーは１２歳）

⑦「何回か読みました。はじめは、みんなで力を合わせることを教えてくれるなと思ったのですが、そのうち命の重さや生きる厳しさのようなすごいテーマがあるように思えました。生きていると様々な立場を（本

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

の中のさるであったり、ライオン、象であったり）体験していると思います。その立場、立場で真剣にありたいと思いました。」（りんごがひとつ）

2. 子育てについての反省をこめたもの　３３通

日常の子どもに接する態度について振り返ったものを取り上げた。口うるさくなっている態度や子どものペースを待てない行動を振振り返ったり、「だいすき」といった子どもに向けて日ごろ言えていないことばを絵本を通して語りかけたりといった感想がみられた。

⑧「絵本の主人公の僕のように自分の子どもにできて当たり前と叱っている自分に反省させられました。ゆったりした気持ちで接することが少なくなってきたように思います。」（もしもぼくがあかちゃんだったら）

⑨「子どもが成長する過程で小さいころはこんなだった、かわいかったのにと過去と比較するのでなく、そのときの子どもの姿を前向きに見守っていこうと思いました。」（ビリーは１２さい）

⑩「自分の子どものためなら周りのことを考えずに行動してしまうことが私にもあるかもしれない（あるはず！）と思いました。子どもがいたら大目にみてくれるだろうと思っている私が、黙ってみていてくれているだろう周囲の人々に感謝したくなりました。」（りんごがひとつ）

⑪「母親のわたしが、かわいい題名と絵にひかれて借りました。内容もいままでみたことがなくなんだか楽しくなってしまう本でした。私が楽しそうに読んでいるとやっぱり子どももやってきて一緒に笑ってみていました。子どもに本を読ませなければとだけ思わず、自分が楽しむことが大切ですね。今度少し反抗期の子どもが機嫌がわるいとき“こちょ、こちょ”でやってみよう。」（こちょ　こちょ　こちょ）

「

3. 子どもの心情に気づかされたという感想　４３通

絵本の登場人物の心情から、自分自身の子どもの日常の行動や心情の理解につながったと述べられていた感想である。

⑫「『おやすみすることのさびしさ』とは今まで理解していませんでした。なぜこの本を読むと子どもが目をうるうるさせるのか。１日の終わる寂しさを子どもが感じたことに気づかされました。」（こぐまちゃんおやすみ）

⑬　「ぐりとぐらシリーズは前から大好きで１年ほど前にも借りて読んでいました。３歳になった今もう一度よんでやると、本を繰り返しよむだけでなく、このお話のまま真似て遊ぶのです。私と息子でぐりとぐらのストーリーを話しながら遊びました。同じ本でも感じ方や表現の仕方がかわってきて、子どもの成長をかんじました。（ぐりとぐらのえんそく）

⑭　「娘にも妹がいて同じ立場なのですが、この絵本を読んでからなぜか赤ちゃんみたいにしゃべったりしていました。『あなたも赤ちゃんになりたいの？』と聞いたら、『うん』と答えたので思いっきりぎゅっと抱いてあげました。」（もしもぼくがあかちゃんだったら）

⑮「子どもに対してつい、出来て当たり前思いがちでした。ささいな日常に新しい経験を積み重ねていく子どもの感情にそっていきたいと思います。『ドキドキ』や『ほっ』という子どものさまざまな感情に気づき、見守りたいと思いました。」（はじめてのおつかい）

⑯「まるで私の娘を見ているような感じでした。家の中でははきはきおしゃべり出来るのに、一歩外へ出ると恥ずかしくて声をださない。気長に待つもの同じ訓練なのでしょうが。」（た、たん）

考察

絵本を読み聞かせることが子どもへの心身の発達に影響をあたえることは、多方面から指摘されていることである。そのことを子どものための義務や仕事のように感じている保護者がいるのではと思われた。それが、①や⑪の感想にあるように「意外に楽しめた。」「自分が楽しんで読んでいると子どもも笑っていた。」といった気づきから、絵本を介した子どもと楽しむ感覚を保護者が育てていくものと考えられた。

絵本を読むことが、子どもへの影響だけでなく、読み手自身の気持ちを様々に喚起したようである。③から⑦のように現在の家庭の状況、夫婦関係、対人関係等について保護者自身の気持ちを整理したり、周囲との関係を見直すきっかけとして絵本の読み聞かせが行われているように考えられた。やはり、子育てに関することも同様で、絵本にあったせりふと日常の保護者の子どもへの話し方の異同に気づいて反省したり（⑧⑨⑩）、⑫から⑯のように子どものこころへの理解につながったりすることが推察された。

これは、絵本の中で、日常で見られる親子関係や周囲との対人関係について同様の状況が再現されるとき、登場人物の言動と自分自身の言動との異同に気づきやすくなると考えられ、保護者自身と心情を客観化しやすいことも理由の一つと考えられた。

絵本を活用することで保護者に様々な気づきを促すことができ子育て支援に活用できることが示された。

NII-Electronic Library Service